

38期から104期まで 198名集まって

第14回総会・懇親会

同窓のよしみで にぎやかに交歓！

静中・静高 関東同窓会 会報

静中・静高関東同窓会
会報 第26号
昭和63年12月13日発行
編集人 月見里得知郎

静中・静高関東同窓会の昭和六十三年度総会は、六月二十三日午後六時三十分から築地のスエヒロ大宴会場で盛大に開催された。

来賓として、新任の鈴木嘉弘校長、同窓会本部の副会長磯谷育男氏、事務局の松永弘道・成島毅一郎両先生が静岡から出席され、宮澤次郎会長と来賓のあいさつのあと、総会議事として六十二年度事業報告と会計報告、ついで六十三年度予算・行事計画が諮られて、それぞれ承認された（別掲）。

いよいよ懇親パーティ！ 最年長の石割正先輩（38期）と、今春母校を卒業した原田真見（東大）・手塚直子（ICU）両嬢が壇上にのぼって、声高らかに乾杯の音頭をとり、宴が始まった。

なつかしい静岡特有のにえぎり

おでん、黒はんぺん、玉ねぎのフライ等とスエヒロの自慢料理をバクつきながら、旧交を温めたり、先輩と後輩の交流の輪はひろがって、懇談の花が会場いっぱいについていく……。

「近いうちに同期会を開いて集まろう」「本部との交流をより活潑に、そして静岡への要望ももっと声を大きくしよう」等々、幹事・役員への希望もつぎつぎに出る。土産品コーナーの安倍川もち、わさび漬、追分羊羹、塩津の小饅頭、鯛めし、山政の黒はんぺんも例年通り好評で、売行きも上々のようだった。

さいごは校歌を高らかに四番まで斉唱し、「来年は誘い合って、もっと大勢で総会へ」と再会を約して散会した次第である。

静岡中静高同窓会 小委員会発足

◎委員構成

(1) 関東（委員長） 53 奥野孝
（副委員長） 59 奥沢徹・60 上杉重吉・67 成岡英彦・68 荒谷じつ子
（常任理事） 70 味岡宏・71 後藤弘枝・87 平岩正史
(2) 静岡（委員長） 54 高橋孝三
（副委員長） 59 河瀬卓二・64 桜井一男・67 安池得之・71 磯谷育男
（常任理事） 68 菅野寛也・70 角替弘志・72 橋本正英・76 松沢弘恵
（事務局） 69 松永弘道・71 成島毅一郎

◎委員会の目的

同窓会組織及び運営の活性化と発展を図り、より魅力あるものとする。

◎経過報告

四月二十三日、五月二十六日の二回にわたり、静岡グランドホテルで静岡及び関東各同窓会の幹部が会合を重ね、今後の同窓会をより発展させるために、若い期の人達を中心となって小委員会をつくり検討することが決定された。

・第一回小委員会（七月三十日東京築地スエヒロ）広域支部の問題、会費納入の合理化他

・第二回小委員会（九月二十八日

その後の同窓会活動

（63年6月～63年11月）

◇幹事会

・63年8月5日（金）18時半～
築地スエヒロ
出席者 28名

・63年度総会報告・収支報告
・会報25号の発送依頼 など

◇幹事会・第三回講演

・63年10月14日（金）18時～
トップランムア 会議室
会費二千元 出席者35名

・会報26号の掲載原稿の依頼
本部と折衝中の規約改正などについて中間報告

・杉山栄一氏（47期）の講演
「北の神秘と時代の動き」

▼お願い▲

一、この会報についてご意見・ご希望をぜひお寄せください。
一、同期会報告、回想・随想・詩歌など、会報の原稿をどしどしお送りください。（15字詰め）
一、年会費二千元未納の方は、同封の振替用紙でよろしくお願いいたします。

静岡同窓会館）規約の再検討、広域支部助成金の見直し他 以上

昭和62年度 静中・静高関東同窓会決算書

I 収 入		(S 62.4.1~S 63.3.31)
61年度 繰越金	190,967円	
61年度 会 費 (49名)	98,000円	
62年度 会 費 (817名)	1,723,000円	
63年度 会 費 (2名)	22,000円	
広 告 料	600,000円	
寄 付 金	60,000円	
預 金 利 息	4,202円	
雑 収 入	1,500円	
総 会 収 入	211,450円	

計	2,911,119円
II 支 出	
会 報	457,000円
名 簿	842,000円
郵 送 費	748,800円
印 刷 費	67,500円
人 件 費 (アルバイト)	100,000円
消 耗 品 費	39,500円
事 務 用 品 費	1,160円
交 際 費	20,000円
雑 費	6,500円
会 合 補 助 費	478,193円
計	2,760,653円

III 残 高 (次年度繰越) 150,466円

上記監査の結果適正であることを認めます。

昭和 63 年 5 月 27 日

監 事 村 松 直 助
監 事 村 井 東 助
監 事 後 藤 弘 枝

毎年九月第一日曜日が恒例の江の島会の総会の日であるが、41回目の今年は会場となる35期永野清氏の恵比寿屋が建替えを行うために、八月二十八日に開かれた。集った岳南健児女併せて37名。まず例年の如く総会が59期の奥沢徹氏の司会で始まった。事業及び会計報告、会計監査報告がなされ、一同これを了承、総会議事は無事終了した。この間42期村松直会長の近況を報じる同夫人からの手紙と写真が披露され、快方に向って歩み続けられておられる様子を安心して、来年は江の島会が42回目となるので42期生の村松会長が来年はぜひ出席できるように一同念じた。その後、鈴木嘉弘母校校長、67期安池得之同窓会副会長から、母校の近況や同窓会活動状況の報告があり、一同懐かしさや強い関心と期待をもって聞き入った。続いて53期奥野孝関東同窓会副会長、43期平山桂関西同窓会会長から、各々心暖まる祝辞をいただいた。続いて懇親会に移り、まず記念撮影、そして42期井出多米夫氏の名指揮の下に、校歌を四番迄完唱

昭和 63 年度 事業計画

1. 総 会 年 1 回
2. 顧 問 会 年 1 ~ 2 回
3. 幹 事 会 年 5 回 位
顧問会と幹事会は合同でやる場合もあります。
4. 会 報 の 発 行 年 2 回 (6月・11月発行)
5. 懇 親 会 ゴルフ大会 (年2回)
釣り大会、ハイキング大会 (年1回) 等
6. 講 演 年 5 回 位

昭和63年度 静中・静高関東同窓会予算

I 収 入		(S 63.4.1~S 64.3.31)
繰 越 金	150,466円	
年 会 費	2,300,000円	
広 告 収 入	320,000円	
其 の 他 雑 収 入	200,000円	
計	2,970,466円	

II 支 出	
会 報 発 行 費	450,000円
名 簿 発 行 費	100,000円
消 耗 品 費	50,000円
郵 送 費	750,000円
印 刷 費	100,000円
人 件 費	100,000円
事 務 用 品 費	5,000円
会 合 補 助 費	450,000円
借 入 返 済	500,000円
予 備 費	465,466円
計	2,970,466円

江の島会

毎年九月第一日曜日が恒例の江の島会の総会の日であるが、41回目の今年は会場となる35期永野清氏の恵比寿屋が建替えを行うために、八月二十八日に開かれた。集った岳南健児女併せて37名。まず例年の如く総会が59期の奥沢徹氏の司会で始まった。事業及び会計報告、会計監査報告がなされ、一同これを了承、総会議事は無事終了した。この間42期村松直会長の近況を報じる同夫人からの手紙と写真が披露され、快方に向って歩み続けられておられる様子を安心して、来年は江の島会が42回目となるので42期生の村松会長が来年はぜひ出席できるように一同念じた。その後、鈴木嘉弘母校校長、67期安池得之同窓会副会長から、母校の近況や同窓会活動状況の報告があり、一同懐かしさや強い関心と期待をもって聞き入った。続いて53期奥野孝関東同窓会副会長、43期平山桂関西同窓会会長から、各々心暖まる祝辞をいただいた。続いて懇親会に移り、まず記念撮影、そして42期井出多米夫氏の名指揮の下に、校歌を四番迄完唱

国際線航空貨物・海外旅客取扱
運輸大臣登録旅行業代理店業3440号

梯フジ・ワールド・エンタープライズ

代表取締役 中馬 敏 雄 (70期)
〒105 東京都港区浜松町1-29-7 河原ビル
貨物電話 434-0591(代)
旅客電話 437-5861(代)
直 通 433-6651
FAX 434-5537

建築設計・監理

ユニオン設計センター

代表取締役 成岡 英彦 (67期)

一級建築事務所登録7425号
東京都新宿区西新宿7-14-9 規格ビル
TEL 03-363-8604 (代表)



し、46期川村春雄同窓会副会長の音頭による乾盃で、懇親会に入った。
恵比寿屋好意の美酒美肴を賞味しながら、同期生同士、あるいは数期にまたがっての懇談の輪が、あちらこちらでみられ、互いに打ち解けた親近感を抱いた和やかな光景が広がっていった。
この間70期藤波はるみさん差入れの珍酒が披露され、一同ありがたく賞味をした。
戦後育ちの参加者が、戦前に卒業された先輩の前で、静中時代の話を聞いている風景は、江の島会ならではのものである。

席上井出氏が、大正15年静中がただ一度甲子園で優勝した当時の状況、想い出を話されたが、一同シーンとして、当時の感激の様子を聞き入った。
宴も終りに近づき、井出氏の音頭で万歳三唱の後、解散となった。しかし、江の島会はこの後に見せ場が来る。

江の島弁天橋の「いそみ」屋台

静岡だより

野球部選抜出場を逸す

来年の選抜につながる秋季高校野球県大会地区予選が、八月十三日から、県下百六校の参加により行われた。静岡が属する中部地区は、静岡・志様の二ブロック予選で、静岡九校・志様七校が中部大会にこまを進めた。

当然、静岡九校の代表に入った静岡は、中部大会でも静岡学園・清水東に次いで中部三位となり、橘と共に四強に入り、東・中・西三地区の上位四校、計十二校による県大会に臨んだ。

この秋の静岡は、力で相手をねじ伏せるかつての迫力には欠ける

に集合、奥沢、成岡両氏の肝煎りの夕日の沈むのを見ながらの二次会が夜遅くまで続いた。
そして、来年の再会を期待してなごりを惜しみながら散会した。
今年、都合で参加出来なかった諸兄姉は、ぜひとも来年はご参加下さるようお願いいたします。
(68期 雨宮明生)

ものの、投打の要となる岩崎を中心に、トップ・バッターの黒田から山崎・大石・斉藤らが当たっており、県代表はもとより、東海大会でも準決勝以上に進んで、選抜への切符を手にする期待が大きかった。

県大会では、一回戦でセントラル黒田のスリーラン・ホームランなどで磐田南を五―二で下し、二回戦では岩崎が粘り強い投球をみせ富士宮西を四―〇で完封、続く三回戦で西部二位の常葉菊川をキャッチャー石渡のホームランなどで五―一で破り、この時点で東海大会への出場権を得た。

県大会決勝では、西部一位で新

チーム結成以来負けなしという池新田高校と対戦したが、県下屈指のピッチャーと前評判の高い池新田のエース下島の右腕の前に、三安打に押さえられ、四―〇の完封負けを喫した。この結果、一位の池新田、三位決定戦で静学を下した常葉菊川とともに、静岡が東海大会に出場することになった。

いよいよ来春の選抜を決める東海大会が静岡県を会場に、十月二十二日から開催された。昨年の本県勢は振るわず、今春の甲子園行きを逃してしまっただけに、県代表三校への県民の期待は大きいものがあつた。

静岡の緒戦の対戦相手は愛知県三位の岡崎城西。中盤までは静岡ベースで試合が進み、二回には先頭の四番岩崎がライト・オーバ―の二塁打を放ち、五番斉藤が送って、一死三星のチャンスをつかんだが、強攻策が裏目に出て、内野ゴロが続き無得点。このほか三回にも二死三星、四回には二死二・三星と得点圏内にランナーを進めたが、あと一步のところまで決定打が出ずに、零行進が続いた。

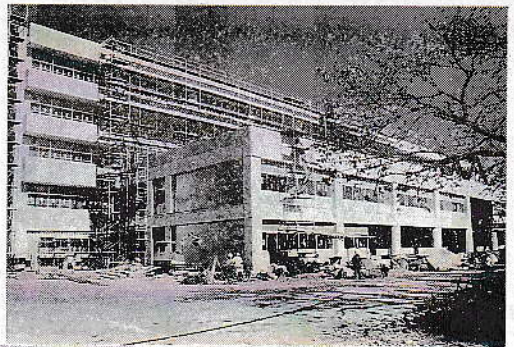
逆に後半は、ピンチをしのいで来た岡崎城西のベースとなり、六回・七回・九回とピンチに立たされたが、岩崎が何とか踏ん張って

〇―〇のまま延長戦に入った。
十一回表、岡崎城西は、先頭中川がセンター前ヒット。一死後岡崎城西きつてのスラッガー、四番進がバッター・ボックスに。キャッチャー石渡は最初カーブのサインを送ったが、岩崎は首を振って直球勝負にでたのが高めに浮き、左翼席ぎりぎりに運ばれた。このスリーラン・ホームランで均衡を破った岡崎城西がその裏の静岡の反撃を押さええて逃げ切った。

静岡は、終盤はほとんど好機をつくれず、終わってみれば期待の打線に火がつかないまま三安打の散発で完封負けとなり、選抜出場の夢は遠のいてしまった。

また、常葉菊川も一回戦で三重二位の海星に九―三で敗れ、池新田も二回戦で愛知二位の東邦に一―〇で破れた。この結果、東海大会で準決勝まで勝ち進むことが選抜出場の必須条件といわれることから、本県勢の春の甲子園行きはほぼ絶望となった。

二年連続で選抜代表校なしというのは、昭和四十四年・四十五年以来という寂しい結果となつてしまった。
(85期 吉永 広)



→前面校門側 後面グラウンド側↓
新校舎完成が近づいたが、その記念式典が、六十四年一月二十八日(土)に静高体育館で催される。



同 期 会

四三期

静岡の三笑亭で毎月二十日に定例で開いている四三会に九月二十日に出席してきた。

今年は天候不順で往復の途中残念ながら秀峰富士の姿も見ることができなかった。

静岡の母校の横を通ったが新築の校舎も殆んど出来上っており五層の外観を眺めることができた。今回の二十日会には関東よりは私と豊島英雄君が出席し、関西より平山桂君が遠路出席された。地元からは所用で欠席者が多くて七名が出席、合計十名であった。

万年幹事の小杉一君から母校の近況や同窓会の幹事会と総会の話があり、欠席者の近況などの報告があった。

引続き昼食会が始まり三笑亭の美味を久しぶりに食べた。

私共のクラスは昭和三年三月三日卒業で今年は丁度六十周年に当たったので、去る一月二十日三笑亭で記念のクラス会を開いた。母校の創立百周年からは十年目に当たっている。次の十月二十日はこの会も八十回になるので、多数の旧友が集まりたいものである。

いつもながら三笑亭の会合はアットホームで、話はずんで時間のすぎるのも忘れてしまう位だ。

三笑亭主人の大石貞次君は目下療養中であり、この会合にも欠席であるが、元気を快復していただきたいものである。

積る話もなかなかつきないが、三時も過ぎたので再会を約して散会した。出席者は写真の十名である。

出席者

後列

西沢純三

高須 彰

小杉 一

豊島英雄

近藤伊佐男

原原三郎

磯谷幸一郎

松永清平

堀田利郎

平山 桂

(西沢純三)



四五期

昨年の暮に「第45期だより」第3号を計画し、皆様に近況ご報告をお願いしましたところ、意外に返事を下さった方が少く、残念ながら冊子としてまとめることができませんでした。

幹事の不行き届き、まことに恐縮いたしております。折角近況をお知らせ下さった方々には、申し訳ありませんでした。大変おそくなりしましたが、この会報を借ってお寄せいただいた方々の近況のあらまし(要約の責は鈴木にあり)を報告いたします。

何れも本年1月〜2月現在の便りです。

伊藤敬三 早朝の適量運動の日課も時折休んだり、立ち居にも思わず掛け声が出るようになりましたが、元気にやっています。

蝦原一郎 最近足痛もやわらいで来ましたが、未だ長い距離は歩けません。「安達太良の空真青なり寒に入る」、「木枯しや満山の樹々耐えており」

草野 哲 昨年(62年)は6月老妻生まれて初めての入院、10月中は退院、11月〜12月まで再入院のあわたたしさ。現在は月2〜3回埼玉県立ガンセンターへ通院、寝たきり起きたりの毎日です。

「老妻(つま)病んで亭主閑白く主夫」となり、「老妻入院す荒れた手眺め茶碗酒」

黒田明彦 鶴巻(温泉)の療養生活も一年半になりました。果樹と花作りの農家が多く、植栽友達が出来、体調良好です。

佐野理平 年末から年始にかけてラグビー・サッカーの観戦に終始しました。まずまずの健康を保持しながら毎日を無事過ごしています。

下川 猛 少々少しかりの体の故障が完癒とまではいきませんが、何とか立ち居がでさ々振舞える

ようになったので、この年令ではまあまあ我慢しなければと思っています。昨年暮に勤務から完全に退きました。思えば70数年の維持が山積して、果して生涯の間に整理が出来るのかと目下モタモタしています。

鈴木弥門 自適生活で3度目の正月を迎えました。毎月6回くらいゴルフに出かけたりして健康管理に努め、何とか元気です。

田附敏三 動脈硬化・高血圧・コレステロール・中性脂肪とそれぞれ典型的な老人症状の保有者ですが、数々の彩とりどりの鋭利使用のお陰で日常生活には不自由を感じません。氣力の方が頃に衰えて硬い読みものが読み続け難くなり、つい随筆の方に手が延びます。「無為是好日」とならぬよう努力はしているのですが……。

千葉保次 小生療養中で近頃は全く遠出が許されません。心の偽りなどを超越して専ら健康第一に暮しております。

堀 正治 高齢者事業団・老人クラブ・絵画教室等と忙しく元気に暮しておりますが、昨年12月初めから何となく胃の調子が悪くなりレントゲン検査の結果潰瘍が出来ているとのことで、目下自宅療養中です。

松林晋一 毎月心臓外科へ1回内科病院へ1〜2回程度通っています。私は皆さんと違って我儘で一匹狼でやって来たので、年をとっても年金等がなく、仕方なく軽い仕事を現在も続けています。

新居 (横浜市磯子区滝頭一四一四) へ転居。電話は〇四五七五一〇〇一七です。(以上) 次期の第45期便り作成の折はぜひ皆様ご協力下さるようお願いいたします。

第45期の定例会は奇数月の第2火曜日午後四時から有楽町の生命保険倶楽部でやっています。都合お差し繰りお出かけ下さい。

四九期

(鈴木弥門)

元氣で二十一世紀を迎えよう。人生八十年の時代となりました。昭和六十二年は男子七十才で、余命は十二・五六才です。あと十二年で二十一世紀を迎えます。現在のすばらしい社会を、一層すばらしいものにしてあげようではありませんか。

去る六月二三日関東支部総会には、在京三五名に連絡したのですが、出席は加藤(馨)、菅沼の二名でした。会場で山崎真紀子さん(静高89期)にお会いしました。

同期の山崎博次君のご令嬢です。現在はプランニングの仕事をやっておられる、仲々明朗活潑な方でした。いろいろ今は亡き博次君の思い出話をして楽しい一時を過ぎました。

又九月二四日には四九期の総会が静岡市鷹匠町の静岡県職員会館(もくせい会館、新築ビル)で開催され出席者三五名で、今回は飯田市在住で八三才で大変元気な大沢和夫先生が出席され、今尚考古学にご精進遊ばされておられるとの事、ご同慶至極でした。

「静岡時代の私の考古学」なるご著書を全員いただきました。内容は
1、静岡中学校敷地内より発掘されし土器片について
2、片山庵寺について
3、静岡市曲金出土の土器類
4、郷土研究余滴
5、最近発見の石器二三について
6、するがすがた五編
7、考古三篇
8、伊豆嶺の沢遺跡について
9、駿河国分寺
等のご研究のご苦心と考古学と民俗学の興味をもたれたご自分の姿がわかるようにと短歌集が添えられている。

先生と行を共にした静中生徒の

発見にかかわる片山庵寺のお話は興味津々のものがあつた。

総会に東京及び静岡以外から参加した者は、
石田、今村、植木、加藤(馨)、直原、篠田、嶋、菅沼、杉本、鈴木(鑑)、田中(良)、東山(旧姓野崎)、安本(久)、相羽の十四名。

又、杉本(久)が九州出張の際、家永敏三先生を訪問した。

先生は現在郷里佐賀県武雄市に住まれ、九十才ながら尚かくしやくとして昔の静中時代の面影を残して居られるそうです。

相変わらず、独立独歩をモットーに望洋義塾を開かれ、青少年の教育に打ちこみ、今や佐賀県で東大進学率の最優秀の塾と評判だそうです。

かたわら家伝の磁器製作に基き後進の指導にあたっておられる由です。(菅沼栄)

五〇期

秋季五〇期会が十月十七日(月)R・プラザで十三名集合して開かれた。今回は静岡からの参加なくいささか淋しかった。各自のスピーチから拾ってみた。

(益田) 弁理士として活躍中。オートボールペンと三菱鉛筆との

「表面張力」に係わる争いは興味深かった。

(江川) 年記執筆中で小学生時代の初恋物語や、新婚旅行先で亡き村松喬君に宿を世話して貰ったこと等。

(一) 左眼白内障を三十分の手術で視力一・〇に回復、目下右腕神経痛と闘っている。次男の倒産再起に協力中。

(大庭左) 女に嫌われる男は①話が面白くない。②自慢ばかりする。③ユーモアがない。

会社で美人採用の効果は①退職が早い。②職場が明るくなる。③ひねくれたところがない由。

(田中) エレキから雑学へ進みヨガ、体操、エアロビクスに精進中。

(大庭富) とにかく毎日家を出るのが健康法。亡き友山崎清文、小島毅、大塚武、甲賀謙次諸兄のエピソードを披露。

(勝又) 薬局を手伝っている。

(梶原) 午前はオートボール。

午後は福祉センターで入浴、将棋、おしゃべり。年寄りには会話が大切。他人が持つと羨しいが、自分が持つと厄介なもの①別荘、②ヨット、③?

(梅村) 三月芝浦工大もやめ、誘われて飲むこと一筋。

(山田) 肉体、精神共使いすぎないこと。暴飲暴食厳禁。先日人間ドックの診断では年令の二分の一の若さとか。二十五才以下の女性としが付合わない由。

(仁科) 娘夫婦、孫二人と六人暮し。シベリア抑留、脳梗塞と困難を経て、今は平靜。

(峰田) 今も現役で、米欧向け視察団を送り出す仕事に関係している。

(永田) 「青春」の詩を座右の銘に、仕事、テニス、碁、俳句を楽しんでいる。次回は八九年四月十七日(月) 同所にて。

韓国研修旅行(十一月二日～六日)に参加。ソウル中心に中小企業五社を見学した。

(1) ウォン高。現在一ドル六九三ウォンで、邦貨は五・五分の一換算だが、米年中には六二〇ウォンになるかも知れない由。

(2) 輸出八〇%、国内二〇%と、国内市場が狭く、貿易摩擦が控えている。

(3) 素材の自給率が低く、輸出が伸びると、対日輸入が増え、貿易収支は黒字になったが対日収支は慢性的赤字。

(4) 輸出は殆んどドル建てで、中小企業を圧迫している。

(5) 賃上げ要求が烈しく、労使関係

が不安定である。八七年三月一四%、九月一五%、八九年三月一二%と賃上げは急であり、政府は月一四万九千ウォンの最低賃金を設定したいが民間は強く抵抗。

(6) 生産性を示す一人当たり年付加価値額は、二百一三百万円で、我國の六百一七百万円とはかなりの距

りがある。

六四期

学窓を巣立って、早や四〇年になる。今年も七月七日の七夕に、名波倉四郎君の世話で、新橋亭に三〇名の同期(静商大原、69期松島、神谷女史も)生が集い、一タを飲談した。卒業後始めて出席した符野達彦君の近況報告、そして六月二十八日急逝した村上幸之君の想い出話が、山本和彦、渡辺素夫、吉井駿亮、岩本吉雄、仲野実君等によって語られ、出席者各人の青春の頃の事などが胸の中に去

来した。

最後に韓国式宴会(破生パーティー)に出てみた。玄關で貰う番号札に応じ着席すると、女将の誘導で破生が右側にはべる。交渉成立すると、一晩三万円位で宴会後のお付き合いをする。具原益軒の「養生訓」に従い、接して洩らさずを心掛ければ、この歳でも二回位はお勤めも可能かとの感触を得たことは、一つの収穫であった。

学窓を巣立って、早や四〇年になる。今年も七月七日の七夕に、名波倉四郎君の世話で、新橋亭に三〇名の同期(静商大原、69期松島、神谷女史も)生が集い、一タを飲談した。卒業後始めて出席した符野達彦君の近況報告、そして六月二十八日急逝した村上幸之君の想い出話が、山本和彦、渡辺素夫、吉井駿亮、岩本吉雄、仲野実君等によって語られ、出席者各人の青春の頃の事などが胸の中に去

来した。

学窓を巣立って、早や四〇年になる。今年も七月七日の七夕に、名波倉四郎君の世話で、新橋亭に三〇名の同期(静商大原、69期松島、神谷女史も)生が集い、一タを飲談した。卒業後始めて出席した符野達彦君の近況報告、そして六月二十八日急逝した村上幸之君の想い出話が、山本和彦、渡辺素夫、吉井駿亮、岩本吉雄、仲野実君等によって語られ、出席者各人の青春の頃の事などが胸の中に去

来した。

六七期

67期同期会とゴルフコンペが十一月二日、熱海後楽園と伊豆大仁ゴルフクラブで開かれた。

67期同期会とゴルフコンペが十一月二日、熱海後楽園と伊豆大仁ゴルフクラブで開かれた。

五五期

十一月四日、昭和六十三年度の関東五十五期会が、今年も新宿区荒木町の「山宮」で開催された。

十一月四日、昭和六十三年度の関東五十五期会が、今年も新宿区荒木町の「山宮」で開催された。

十一月四日、昭和六十三年度の関東五十五期会が、今年も新宿区荒木町の「山宮」で開催された。

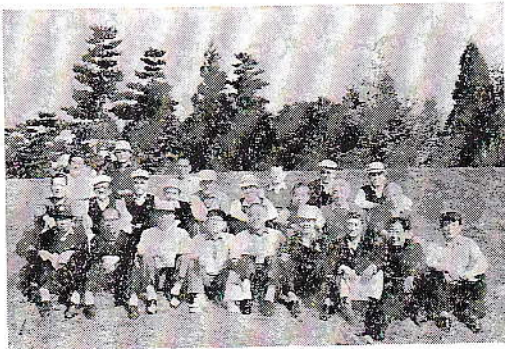
十一月四日、昭和六十三年度の関東五十五期会が、今年も新宿区荒木町の「山宮」で開催された。

十一月四日、昭和六十三年度の関東五十五期会が、今年も新宿区荒木町の「山宮」で開催された。

十一月四日、昭和六十三年度の関東五十五期会が、今年も新宿区荒木町の「山宮」で開催された。

十一月四日、昭和六十三年度の関東五十五期会が、今年も新宿区荒木町の「山宮」で開催された。

十一月四日、昭和六十三年度の関東五十五期会が、今年も新宿区荒木町の「山宮」で開催された。



ス(88)にも輝いた。

ただ問題は、67期コンペ名物の優勝楯。正確に測ったことはないが、タテ約80cm、ヨコ約50cm、厚さ約10cmもある大楯で、しかもこれがカシの木(多分)で出来ている。その重さたるや、大相撲の優勝楯にふさわしく、五十歳半ばを越えた67期の面々で、これを一人

で持ち上げられるのは、おそらくその昔、キャッチャーで鳴らした（？）大男の西畑隆志君ぐらいなものだろう、という代物だ。そこに、大文字で「印高」と彫り込んでいる。

優勝すれば次回までこれをあずかり、また会場まで運んでこなければならぬ。いつの間にか67期コンペは、この楯こわさに優勝だけはしたくないという、世にも珍しいコンペになった。この「有用の長物」を同窓会館に寄付したらどうか、という声が、今回一段と高くなった。

夜の同期会は二十五人が顔を見せた。出席予定は三十数人だったが、間際になって都合が悪くなった人が続出したのはちょっと残念だった。

67期は今五十五、五十六歳になる。定年は六十歳でも、五十五歳前後から関連会社へ出向したり、新しい事業を始めたりする人が目立つ。私生活でも高齢化した親の世話、息子や娘の結婚など話題は尽きない。

久しぶりに羽目をはずした宴会は、ちょうど天皇自粛ムードでお茶をひいていたキレイどころも張り切って、一次会から二次会、三次会と夜半を過ぎてなお延々と続

いた。

一夜明けた朝風呂では「よく飲んだなあ」まだ体力あるね」と一同満足顔であった。

なお、宿泊同期会の参加者は、石原昌吉、岩崎為明、遠藤一彦、小沢敏二、織田三喜彦、大石脩而、太田雄造、岡田宏司、梶原由三、川上剛二、黒田秀幸、小坂博、杉山光雄、成岡英彦、福原亨一、牧田仁男、増田智一、溝口淑郎、望月政男、八木忠男、安池得之、山下晋司、横山泰昌、吉沢清治、渡辺真任の諸兄で、ゴルフコンペにはこのほか、秋山泰利、石井満男、海野定也、高田誠二、滝川博、西畑隆志、増田安國の諸兄が

追悼

金子君の思い出と

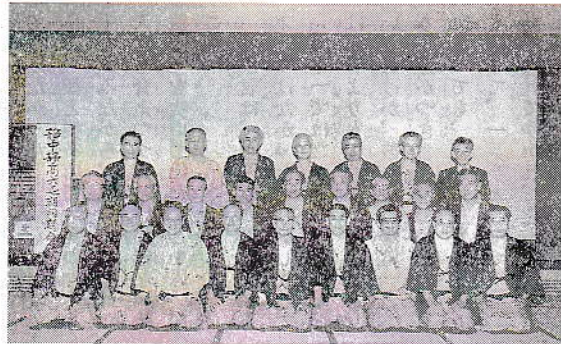
その死について

55期 中田 吉信

本会報第二五号に、野中篤君の「あゝ神風特別攻撃隊故金子保君に捧ぐ」という長文の追悼文が掲載された。秀才であり、スポーツマンであり、人望もあつた金子君のことだけに、第五五期全員が感慨深くこの文を読み、改めて彼へ

参加した。

(大石脩而)



の追慕の念に駆られたものと思う。筆者も例外でない。

金子君についてはいくつか思い出がある。

昭和一五年四月初めのことだった。浪人が嫌なので、東京の私立大学を片っ端から受けたが、思いもかけず、旧制静岡の文科へもぐりこめた筆者は、翌日が入学式という日に静岡に帰ってきた。大火で無残な焼け跡となった静岡駅で

彼に会った。父君と一緒に、聞けば、浜工（浜松高等工業・現静大工学部）の機械科に推薦入学できたので、これから浜松へ行くと言った。もう蛇腹を巻いた丸い帽子をかぶり、すっかり浜工生になりきっていた。筆者は最後まで落ち着き先を迷っていたので、まだ静岡の帽子のままで、何となく体裁が悪かったのを今でも覚えてい

時、開業医の息子はみんな医者にさせられていた。嫌でも仕方がないのである。兄もそうであったし筆者も父が生きている間はそうさせられる筈であった。父が死んだので、文科に鞍代えできたのである。その金子君が浜工へ行くと言ったので、どうしてかと思議に思った。しかし、父君も傍にいたので、その理由は聞きそびれた。その後、二、三回、彼に静岡で会ったと思う。しかし、どんな話をしたか覚えていない。けれど、この十五年四月の静岡駅頭のことだけは忘れられない。

野中君の手記によると、彼はその後、名古屋大学に進み、徴兵延期を自ら蹴って海軍に入隊、特攻隊に志願したという。筆者はここでも「どうして」と問わざるを得ない。我々文科の学生は、徴兵延期が廃止されて、決々入隊した。懦弱な筆者などは徴兵猶予のある理科の学生がうらやましかつた。

十八年十二月一日の入営を目前にしても嫌で嫌でたまらず、「タラワ・マキン両島の玉砕」の報に、これで戦争が終ってくれたらと、心ひそかに祈ったものである。しかし、金子君は自ら志願して死地に向かって行った。「大君の御盾として、最後の御奉公を致す」た

めに「喜んで散って行った」のである。

戦後、彼の戦死を聞いた時に、まず思い浮かべたのは、父君のことであつた。医者への道に進ませれば死なせずにすんだのではないか、自分のあとを継がせることができたのに、と思われたのではないか。恐らく人の親ならば、こう考えるのが普通だと思ふ。もとより、金子君のことだから、自分の行きたい道を父君に話し、父君も納得した結果であつたらう。悔いはなかったと言ふかもしれない。しかし、それでも筆者は残念だと思ふ。彼ほどの人材が、僅か二十四歳で死んでしまふなんて、実に悲しい。指導力と人望では同期生随一の彼だっただけに、今生きていればと思ふ。どうして徴兵猶予の特権を利用して生き延びることを考えなかったのだらうか。理工科の学生は、「今戦死するより数年後には技術で国のために役立ってくれ」という期待で、残されたのである。金子君も敵の中に突っ込むよりも、立派な技術者として、堂々と生き残つて欲しかった。そのための学問であつた筈である。

それならば金子君を急いで死に追いやつたのは何だつたらうか。

やはり軍国主義教育のせいだつたと思ふ。当時の静中の教育方針もそれであつた。「自由」や「平等」はもとより、人間に対する「愛」も、生命の尊さも教えてくれなかつた。ただ成績を上げ、身体を鍛え、「大君のために死ぬ」ことしか教えられなかつたような気がする。戦時中とはいへ、もう少しまともな、「人間」としての教育をしてきていたらと思ふ。金子君は「真面目」だつたから、その静中の教育方針通りに「義勇奉公」を実践して、死んでしまつたのだらう。筆者は「不真面目」だつたから生き延びることができたのである。大分年下の弟さんが、立派に父君の跡を継がれたと聞いて、ひとごとながら安心したのは、随分後のことだつた。

だがよく考えてみれば、彼は自分で「死」を選んだのである。しかも二階級特進の榮譽を受け、少佐に昇進した。少佐と言へば、文官ならば大学を出ても十年以上は働かないとなれない地位である。国家も彼の「功」に一応は報いたと言えよう。あるいは「以て限すべし」と言い切つても、不当とは思えないだらう。

それよりも哀れなのは、死にたくもないのに無理やりに死なされた

連中である。懦弱な筆者の周囲には、こういう輩が相当数いた。

「反戦」運動を起こすような勇氣はなかつたが、戦争が嫌で嫌でたまらなかつた「不忠の臣」である。牧田善之助君などはその代表ではなかつたかと思ふ。兵隊に連れて行かれる少し前に、中野正剛自殺のニュースが報じられた時、彼と辻本順一君が憤慨して「東条打倒」を口にしてたことを思い起こす。勿論、聞き囁りの生半可な知識だつたかも知れない。しかし、どうしても、当時の日本の行き方には、精神的にも体力的にもついて行けなかつた「弱虫」もいたのである。彼と喫茶店で大豆のコーヒを飲みながら、数日後に迫つた入營に脅えつつ、いい加減な「駄法螺」を吹いていたことを思い起こす。

牧田君は、金子君のような「秀才」ではなかつた。しかし決して「鈍才」ではなかつた。英語などは筆者よりもできた。だが、どういふわけか、彼には「落第」という不運が付きまとつていた。兵隊になつても、幹部候補生の試験にも落ちて、一兵卒としてサイパン島に連れてゆかれ、死んでしまつたという。さぞ無念だつたらうと思ふ。「名譽ある戦死者」として

一等兵か上等兵に昇進したであらう。僅かな一時金が家族に支給されたかも知れない。けれど、国家からの報われ方は、金子君と比べると「月とすっぽん」であつたことは確かである。

牧田君が今生きていても、そんなに偉くはならなかつたらう。しかし、裕福な彼の生家と優秀な人材を輩出した家系を考えれば、筆者なんかよりはずっと優雅な生活を送ることができたに違いない。今ごろは本物のコーヒを飲みながら、これも死んでしまつた豪傑辻本君も交えて、「なかそね」や「たけした」の悪口を叩いていたかもしれない。

五十五期の同期生の中には、軍人に憧れて海兵や陸士へ進んで行つたものもいた。また「ヒコキ乗り」が流行つていたので、卒業と同時に、その方へ行つたものもいた。そういう連中は大抵は死んでしまつたと思つていたら、なかには「このこと」と帰つて来たものもいた。また兵隊には全く向かない「懦弱グループ」もいた。その中にも筆者のような「このこと」復員組もいたし、虫けらみたいに殺されてしまつたものもいた。戦争は何の基準も無しに、人の運命を明と暗とに分けた。

一番哀れなのは、死にたくもないのに殺された連中である。自ら志願したならば諦めもつこう。けれども、無理矢理に親兄弟友人と離され、見も知らない島へ連れて行かれ、ろくな物も食わしてもらえず、「お国のために死ぬ」と言われたのでは、たまつたものではない。牧田君の死に方がどんなであつたかは知らない。艦砲射撃に直撃されて、一髪土に残さなかつたかも知れないし、怪我で苦しみがら、洞窟へ逃げ込み、あぐくの果てに火炎放射器で焼かれてしまつたのかも知れない。「生きて虜囚の辱めを受けず」と厳しく言われていたから、「降伏」もままならなかつたであらう。いずれにせよ、悲惨な最期だつたに違いない。不思議なことに、その牧田君や辻本君を戦地に引つ張つて行つた陸軍のお偉方は、東条を始め、小磯も、荒木も、一人として「名譽ある戦死」を遂げなかつたし、空襲でも死ななかつたという。やはりひどい時代だつた。

村上幸之君を偲ぶ

64期 近藤 俊彦

オリンパス光学株式会社担当事務であった村上幸之君が亡くなった事を知ったのは七月三日午後、稲見君からの電話連絡だった。驚いて新聞を取出して見ると、彼が六月二十八日(火)三時二十八分に永眠した事を写真入りで報じていた。

今になると、村上君が何時頃から島田にきたのかハッキリ思いつく事が出来ない。然し彼と私が本当に親しく口を開く様になったのは敗戦後、今の登呂遺蹟の上の住友の校舎を、火災で「校旗」と共に失い、三菱発動機工場の跡に移転した頃からだった筈だ。

クラブ活動をしようと言う事に、伊藤康雄先生(ターザン)の下で科学部を作ったが、戦災と前記火災で焼け出された我々に、道具らしい物は一つも無く、旧工場内を探索と称してホツキ歩き、水溜まりの中から飛行機用エンジンの感応コイルを拾って来て、薄暗い部室で放電、紙が焼けて孔があいたと云っては喜んでいた。

そんな或る日、方々から拾い集めた薬品類の中に、封をした一ポンド瓶。開けてみると白い結晶。青酸カリじゃ無いかな? 青酸カリじゃ無いかな? 青酸カリじゃ無いかな?

か? とワイワイガヤガヤ。その時彼が、青酸カリなら酸と反応して白煙が出る筈だ! と云い出した。それじゃーと時計皿に結晶を入れ、塩酸が硫酸を一瓶持つて広場の隅に行き風向きを確認、恐る恐る酸を掛けたトタン、モクモクと出た白煙に大慌てで逃げたものだった。あの時、化学の苦手な私は、(その後繊維化学を専攻しましたが)直ぐに酸と反応させれば判る筈だ! と云った彼に驚いたものであった。

もう一つ彼で驚いた事は、四年になったばかりの頃と思ったが、東京に進学の模擬試験を受けに行った事だ。今でこそ、娘も若子もテストに明け暮れているが、敗戦間もないあの頃……。最も伝統ある進学校静中、私がノンビリし過ぎていた為、一寸刺戟を受けた思い出と云う事になるかも知れない。

静高に進学後も私が帰省したときは、屢々行き来した。そしてヒョんな事から、二人で何も持たずに朴樹を履いて竜爪山に昇り、浩然の氣を養った事もあった。途中清流での美しい河鹿の鳴声は、今も懐かしく耳に残っている。

静大理学部卒業と同時にオリンパス光学に入社、その大部分を検査・品質管理面で、単にオリンパス社内のみならず広くカメラ業界でも活躍。

昭和三〇年代前半から半ば頃のこと。日本のカメラは、材料一つ一つを分析しても、ドイツのカメラと遜色が無いのに、外国人の手荒な扱いに弱いんだ! と嘆き、又 Hズイコー等レンズの話から、取差の補正にレンズを組合せるが、中心部に三枚以上のレンズは害が有っても益は無い。だからドイツの新しい構成のレンズの中には、ドーナツ型のレンズが含まれているとか、カメラとしての標準レンズの考え方は、写るフィルム

の対角線の長さ、即ち六×六判は八×九センチ、六×九判は一一センチの焦点距離のレンズ、是れから見ると三五ミリライカ判は、二四ミリ×三六ミリだから四三ミリとなり、五〇ミリの現状より稍広角気味のレンズである事、等々話してくれた。

そんな或る日、彼の職場で話をしていた時、何かの用事で呼んだ女子社員に対し、彼らしくない凄くぞんざいな言葉使いなので不思議に感じながらも、それとなく注意したら、おチヨボ口をして聞いていた彼の顔がニヤッとした。それから意外な言葉、スマン、コン

ちゃんには未だ紹介してなかったかナア? 彼女フラウだヨ、ヘヘ……でチョン!

最近御無沙汰していたが、まさか入院、そして、急逝されるとは……。

七月七日、六四期東京の例会はさながら彼を偲ぶ会となった。七月二三日(土)一三時よりの中野の宝仙寺でのオリンパス光学

回想・随感・近況など

イベリヤの旅

43期 吉江 誠一

去る十月、機会を得てポルトガル、スペインを訪問した。なに分十日余りの駆足旅行のこととて、観光に終始してしまつたが……。

両国とも私にとっては平素余り縁も無く関心も乏しいほうだが、ポルトガルと云えば、わが戦国時代

に種子島に漂着した最初のヨーロッパ人がポルトガル人であり、鉄砲の伝来を始め、いわゆるキリシタン文化や南蛮文化により、わが国近代化の糸口を開いてくれた

国であり、「パン、カステラ、テンブラ、シャツ、ボタン」など、お世話になつて言葉もポルトガル語からと聞いている。いっぽうスペインと云えばまづ頭に浮ぶのは闘牛とフラメンコ、それにこの国を舞台としたカルメンやドン・ファンやドン・キホーテの物語りなどがあるが、私が青年将校の頃格別の関心を誘つたフランコ將軍による武力革命や、この革命に断乎反対したヘミングウェイの、「誰がために鐘が鳴る」から受けた感動などは、比較的新らしい想

出でた。こんなことを心に描き乍ら機上の人となり、アンカレッジを経てアムステルダム、ロンドンで航空機を乗り継ぎ、ポルトガルの首都

柳による告別式には、女子師範付属小学校同級であった岩本吉雄君が弔辞を呈し、野沢正憲君と私が出席させて戴いた。大層盛大な告別式であった。

合 掌

リスボンに着いた。

ポルトガルは僅か二日間で、第一日はリスボン市内を、第二日は詩人バイロンが地上の楽園と讃えたシントラを経て、ヨーロッパ大陸の最西端ロカ岬を訪れたに過ぎないが、私の接した範囲では、すべて(とは云い過ぎかも知れぬが)が、バスコ・ダ・ガマのインド航路発見を中心とする十五・六世紀の最盛期の栄光と歴史を讀え伝えようとしているように思われた。

華麗壮麗なジエロニモス修道院はガマの航路発見を記念して建てられたものであり、テージョ河畔の海洋世界発見記念碑も、かつて大航海時代に活躍した著名な勇士たちを白大理石の像に刻んで乗り組ませた船首を象っており、特異な建築芸術と云われるベレンの塔はガマの出航地点を記念して建っているという。また、大西洋を望むロカ岬に建てられている記念塔に刻まれた「ヨーロッパ大陸ここに尽きる」ところ、これより大洋が始まる」との言葉も、バスコ・ダ・ガマを始め当時の勇士たちをして、未知の航路開発への意慾を掻き立てたものであろう。

しかし、こん日のポルトガルには、かつての海洋先進国として七つの海を支配し、多くの植民地を擁して世界に臨んだ面影はなく、後に述べるスペインに比べても至って平穩地味で、民俗舞踊のファドも、フラメンコのような情熱的な陽気さは無かった。ただ、いかにもポルトガルらしい豊富なワインと美味しい海鮮料理とは私たちを十分楽しませてくれた。

ポルトガルを終え、コルク樞やオリーブの林を抜けてスペイン南部のアンダルシア地方に入った。歌劇セビリヤの理髪師で有名なセビリヤを始め、コルドバ、グラナダ、地中海沿岸の保養地トレモリノスと泊り歩き、最後にバルセロナから首都マドリッド(近くの旧都トレドを含む)を訪れてスケジュールを終えた。

スペインは、北部地帯は肥沃らしいが、南部は不毛な沙漠に似た乾燥した平原が多く、そこに一定間隔を置いたオリーブの灌木が見渡す限り植えられているという単調な景色であるが、一旦都市にはいると、そこにはかつての繁栄と激しい興亡の歴史を物語る豪華な建物が残されている。ゴシック様式としては世界最大といわれるセビリヤのカテドラル(大聖堂)、コルドバでは二〇〇年かかって完成したというイスラム寺院のメスキータ、グラナダの豪華なアルハ

ンブラ宮殿、また、トレドではスペインの黄金時代を物語るアルカサル(王城)やカテドラル等々。一つ一つを紹介する紙面の余裕はとも無いが、イスラム全盛時代に人民の血と汗を注ぎ込み、一〇〇年、二〇〇年という歳月を費して建設した壮麗な宮殿や王城や大寺院。そしてやがてこれらを征服して行ったキリスト教徒の強引な闘い。しかしそのキリスト教徒たちさえも豪華な回教寺院を壊すに憚りなかったのか、回教寺院の中にキリストが祭られているという極めて奇妙な様相が到る処に見られ歴史の上に重ねられた歴史の深さを物語っていた。また、一歩裏通りへはいると、迷路のような石畳の路地を挟んだ白壁に赤いセラニウムの鉢やランプ灯が懸っているという、画家や芸術家が愛好しそうな、いかにもスペインならではの風情が残っている。

バルセロナは四年後には国際オリンピックを迎えるための準備と活気に溢れており、港を見降ろしているコロンブスの像、スペインの天才的建築家ガウディが設計し一八八四年に着工しながら一〇〇年を経た今もなお未完成でと一〇〇年ばかりかろうという聖家族教会の四本の怪奇な塔など、オリ

ビックでも話題を呼ぶことであらう。

首都マドリッドは、大都会としての繁華さに溢れ乍らも、実に落ちついた床しさを保っており、フラメンコ独裁のあと、立憲君主制下の元首ファン・カルロス国王に対する国民の信望の厚さを語っているかのようであった。

かつては世界の海を制して到る処に領土を確保し、「日の没すること無し」と迄云われたスペインであるが、今はその勢いは無いとはいへ、深い歴史を秘めたこの国が、今後果してどんな歴史を辿るであろうか。四年後を目指して全に建設が進められている各種競技場やホテル、ハイウェイの拡幅工事など、来るべきオリンピックの成功と、そこから始まる新らしい歴史の発展を祈りつつイベリヤの地を離れた次第であった。

シベリヤ寸描

47期 関口不二夫

私の同期の杉山栄一君が、『シベリヤ帰りの私に、『シベリヤの凍土』を読まないかと借してくれました。著者の山本泉一君は同じ静中の後輩で、これは相当厚い本でした。

私は昭和十八年に召集を受けた

補充兵で当時三十一才、すぐ満洲のハイラルの部隊で初年兵からの教育を受け、兵長になったところから二十年八月のソ連の参戦になりました。ハイラルの町が大爆撃を受けている最中に、司令部の中將閣下の乗用車を追いかけて、衛兵の私達はトラックで興安嶺の地下壕に逃げこみました。

山本君は少尉、私は一兵隊として、夫々抑留生活を送ったわけですが。

以前に石川達三氏の『風にそよぐ草』という本が有名でしたが、私にとって兵隊生活の復習は、もう沢山と思つて手にしませんでした。シベリヤの生活は軍隊のそれより数倍も悲惨なものであっただけに、このシベリヤ抑留記も読まずに返えそうかと思ひました。しかし、この本の最初のところをめぐった時に、『同じシベリヤの体験記であっても、抑留年月がちがい場所がちがえば、夫々の印象も考え方もちがう』という文が目につき、それならば彼の場合はどんなであったかと考え直し、はじめから読みはじめました。

私の場合、シベリヤの奥地まで連れてゆかれたのではなかったのでしたが、シベリヤ鉄道を貨車でこぼれた時の体験は私のそれと

そっくりでした。この記述を私は通勤の電車の中で読んだのでしたが、乗っている電車のひびきと共に、いままあの貨車の中にいるような錯覚におち入り、腹の底までぞっとしました。そしてはっと気がついて、あゝ私は日本の内地にいるのだ、自由の身なのだと思いかえし、平和な日本に生活している今の境遇を本当に有難く思ったことでした。

あの生活から四十数年たったこの頃になってやっとシベリヤと縁が切れましたが、帰還してから長い間マンドリン（ソ連兵の持つ自動小銃）に追いまわされ、ダワイ、ダワイ（仕事をしろ）とこきつかわれている夢をよく見たものでした。

この本はあれから数十年たってから書かれ、色々な資料を参考にしたとありましたが、実によく書けていると感心しました。私達はラーゲル（捕虜収容所）と作業場との往復の毎日で、デマ情報、そして捕虜用の日本新聞以外はソ連の内部事情、日本内地のことなどは知るよしもなく、つんぼさじきにおかれていました。

私達はソ満国境に近いダベンダという町にいました。金とモリブデンの鉱山があり、仲間のうち重

労働に適するとみとめられた者はカンテラを下げて坑内に入り、トロツコの線路の水を割る作業に従事した由です。坑内作業をする増食といって大きなパンを支給されます。私は無理することなく、とにかく生きて内地に帰ろうと、戦友のたべるパンをあきらめと共にうらやましく見ていたものでした。

このダベンダで二冬こして、二年あまりの抑留で帰還しましたから、全抑留者のうちでは早い方の部類に入り、幸運でした。

ダベンダは緯度は樺太よりちょっと北ぐらいですが、冬は零下四十数度にさがりました。それでも私達は着たきりのシャツ、セーター、軍服、オーバー、そして防寒帽のみで、よくもつたものだと思います。

零下四十度が、ラボータライン（屋外労働時の最低温度）ときめられており、朝、寒暖計の目盛が四十度にあがるまで営内待機でした。鐘がなって屋外に五人縦隊でならび点呼をうけます。ラーゲルには兵、軍属あわせて約二千人いました。一人のソ連の下士官が屋外、屋内の員数を数え、総数があれば解散し夫々の作業場に出発します。

この点呼に、背の高い鼻の赤い男が当番だとい同がっかりしたものです。というのは、この男の場合いつも総数があわず、何回も数え直すので、私達は長い間寒空に立たされるからです。よほど頭が弱かったのでしょうか。

私は内地では事務系の会社員でしたから、いつも雑役ばかりで、穴掘り、伐採、建築、道路補修等を皆と一緒にやらされました。

作業のうちで一番嬉しかったのはジャガイモ掘りでした。朝食の時に昼の携行食もたべてしまい、カラの飯盒をさげて出かけます。

イモ畑は広大地平線の彼方まで続いています。三人一組になり三つねを担当し、一人が掘りおこしながら後退し、あとの二人がイモを籠に入れながら前に進みます。

労働に適さないものは、作業開始と同時に皆の飯盒でイモを煮、かつ火の中はうりこみます。作業やめ、小休止の号令と共に、自分の飯盒のイモをまずかぶりつき、次に火の中のイモをと、まるで餓鬼みたいに平げ、食べ残りはもって帰って営内の仲間にかけてやりま

す。私達は、いつも岩塩を粉にしたのをもっていて、これをつけて喰べます。ラーゲルでは塩は砂糖より貴重品で、昔の上杉謙信、武田信玄の塩の話がなるほどとうなづけた次第でした。

われわれとちがって、特殊技能をもっている人達、例えば内地でパン製造、菓子製造に従事していた人達は、黒パン工場で働いて

いつでも、おなか一杯喰べられます。パンは持出禁止になっていましたが、こっそり持ち帰り、物々交換品となります。営内で交換価値の高いものは、第一に食料品、二番目がキザミ煙草と、それを巻く新聞紙でした。アルミ製のスプーンもパン一食分でした。器用な連中が拾ってきたアルミ電線を材料にし、作業を終えてラーゲルに帰ってからこっそり鋳物製品をつくるのです。

次は床屋さん。ソ連の将校の調髪、ひげ剃りをするときザミ煙草あるいは四角に切った新聞紙が貰えます。ソ連のキザミ煙草は、新聞紙に巻いてすうのが一番おいしく、コンサイス辞典の紙はまずくためでした。

一番待遇のよかったのは絵描きでした。朝点呼が終ると一人で将校の官舎に行き肖像画をかくのです。ご主人の次は奥さんです。この奥さんも親切にしてくれ、いろいろご馳走になったと言ってい

ました。

山本さんは内地と文通したとありましたが、私が内地宛に書いた二枚の葉書は届いていませんでしたし、ラーゲルに内地から便りがきた様子もありませんでした。

舞鶴に上陸して静岡市の私の留守宅のあたりが罹災していないことがわかり、電報をうちました。私の家族はこの電報ではじめて私の生存を確認できたわけで、召集をうけた時に生れたばかりであった長男をはじめ、家族達と静岡駅頭での感激の対面という事になるのです。

シベリヤ抑留者のうち十萬近い方達があの凍土にねむっていると聞かされています。幸い私は五体満足で帰ることができ、家族も無事でこの平和な日本に生活していることを本当に有難く思うと同時に、亡き戦友の方々のご冥福を心から祈るものであります。

へそ天

60期 時田 正康

私は今年三月、四十余年勤めた気象庁を無事「卒業」することができた。その最後の二年間は長野市に勤務した。

私達は子供の頃、隣県の山梨、長野の人達は勤勉家ではあるが、

油断のならない人も多いので注意した方がよい、と言われたことがある。気候温和で食物の豊富な静岡の人間は、気候の厳しい山梨、長野の人達と比べ警戒心が弱い。よく言えばお人よしでのんびり屋だが、ぐずで他人まかせのところがある。そんなことから隣県の人達を恐れていたのであろう。

しかし私の気象庁での友人には長野県出身者が多いが、私にとってはそんな心配をしたことは一度もなかった。むしろ腹をわって話し合えるよき友であり、いろいろなことを教えてくれるよき師であった。そんなことから私は、安心して長野に行き、あつという間の二年間ではあったが、楽しく仕事をすることができた。正しくは楽しく仕事をさせてもらった、と言うべきであろう。

その二年間、毎日新聞長野支局から原稿執筆の依頼があり、毎週金曜「へそ天」と題して駄文のせることになった。「へそ天」というのは、予報官仲間という言葉で、よい天気と間違いないというときに使う。そこで私は、何を書いてもよいと言われたので、仕事や趣味のこと、長野や静岡のことを思いつくままに書いた。やっっているうちに、もう止めようと思っ

たことが何回かあった。しかし今週は面白かったと電話をいただいたり、毎週金曜日が楽しみだといつて励ましてくれるので、とうとう昨年末まで二十か月も続けた。長野の人はよく新聞を読み、親切な人が多いとつくづく感心した。

退職にあたって人からの勧めもあって全文をまとめ、写真もいれて自費出版した。私にとってはたいへん記念になったが、人にお勧めするような本ではない。しかしもし希望される方がおられれば、まだ若干部数残っているのでお分けたいと思う。

最後にその「へそ天」から静岡に関係のある一節を紹介させていただきます。

懐かしい節分の思い出

正月が来たと思ったら明後日からもう二月。三日には「節分」を迎える。節分は季節の改まる日といい四季にあるが「立春」の前日だけに使われている。寒さの厳しい冬に別れを告げ、明日は暖かな春を迎える。そんな喜びから立春前日だけが残っているのかもしれない。ところで節分会の行事は、中国では紀元前からあったそうだが、「福は内、鬼は外」の声がか、ここ城山周辺にも聞かれるに違いない。

私の子供の頃の節分は、子供達

にとつて年周一、二のビッグ・イベントだった。夕食もそこそこ子供達は、母親に作ってもらった手拭(ぬぐい)を二つ折りにした袋を手にして、十数人の集団で町内の家々を回る。どこの家でも戸障子をとりはらって座敷を広くして子供達を喜んで招き入れ、ざるの中の豆をまいた。豆といつても、ざるの中は豆、ビーナツ、袋菓子、紙に包んだ一銭玉などがあり、家に帰って親に得々と戦果を報告する。今、故郷の静岡では、この風習が見られない。しかし、私には懐かしい思い出になっている。(昭和62年1月30日)

下野(シモノ)はいつに

64期 鈴木 明郎

戦争は既に、たけなわであったが、まだ大岩の校舎での授業であった。世界史に下野先生という方がいらっしやう。物凄「チビ」で、ド近眼、喋る時口をヤヤとがらせ、とがらせたまま息を吸うので、シュウーというような音がした。誰かが「チビ」と言ったのが聞きとがめられ、コテンパンになぐられたこともあった。

或る日の授業中突然、「万世一系の天皇ナンテ言ウワァ……」

と例の如く口をとがらせて、うそぶくように言い出した。

うつらうつらと聞いていて、前後の脈絡はわからぬままに、皆ビクビクこいてしまった。なにしろ「畏れ多くも、キオツケー、天皇陛下におかせられては、モトイ……」と云うカッコいい教官が居たし、当時は現人神(アラヒトガミ)であらせられる「天皇陛下」という言葉は、姿勢を正して、言ったり、聞いたりしなければならぬものだったからである。シモノ先生があと何を言ったのかは覚えていない。

やがて武器庫から三八式歩兵銃が消え木銃が並ぶようになった。戦争も多分末期の頃、シモノにも召集令状がきた。全校生徒がゲートル姿で並び、義勇奉公の校旗が捧げられる中、先ずタヌキの様な校長が、いつもの様な祝辞を述べた。国民服にゲートル、ヨレた戦斗帽もサエないシモノは、(不思議に下野先生には仇名はなかった。仇名をつける暇もない出現であったのかも知れない。皆シモノ、シモノと言っていた)精一杯しゃちほこばって壇上に立ち、宙を見据えてやおら「不肖、下野ワァー、天皇陛下ノオ、命にヨリイ、……行って参ります」と小柄な体

から、普段聞いた事もないような大音声を張り上げて答辭をしやべり出した。ただこれだけの話であるが、そして、そのあと何を聞いたかは夢幻の彼方のこととなってしまった。しかし、あの木洩れ日のチラチラする長谷校舎でのシモノの本当に言いたかった事や、出征式の時の胸のつかえをたたきつける様な大音声は今も鮮明に想い出されるのである。その後終戦になり、住友の馬小屋教室に、我々元、赤子(セキシ)の前にその時は既に人間になった天皇が現われた。マンジュ(数学の先生)がいつもは「赤いヤツと黄色いヤツ……」と言ってチョークを使って説明するところを、「赤いモノと黄色いモノ」と言うのがややおかしく、又声も震えていた。

宮崎保はもっと観察が鋭く、「ヤイ、明郎みたか、MPが(天皇のうしろには、ピストルを腰に差したMPが二人立っていた)チュウイシヨニヤナーナ、おら、クサッチャッタヤ」と言ったが、私も元現人神の顔は勿論、ポケットに手突っ込んでいるMPをも、ちゃんと見ていたのであった。

社交ダンスの勧め

68期 荒谷じつ子

健康は自分に贈る最高のプレゼント、健康維持には毎日一万歩、歩くことだそうです。音楽と共に楽しく歩ける社交ダンスは中高年の運動には最適の一石二鳥のスポーツです。「123 ハイ! スロー スロー クイック クイック ……」会場は熱気でムンムン! 八十歳の男性もいきいきと背筋もシャンとした健康優良児、老後の生き方の見本です。二人でないと踊れない社交ダンスなのに、男性は大変に少ない。「婿一人に嫁? 人」女性ばかりで男性が少なく、踊れる男性なら八十歳でも貴重品でクモテモテです。今は少なくなりつつある男性天国の世界です。岳南健児なら特にモテモテです。「音楽オンチでダメ」と思われる方でも立派に踊れる様になります。私の主人がよい見本です。「男女七才にして席を…」戦中派のコンコンチンの「木偶の坊」「社交ダンスなんて不良のするコト」と大変に嫌がりました。初めの内は気の毒な位堅くなり、緊張の余りガタガタと震えて、練習のパートナーはモッパ私私が担当してました。二人共全く初めてでしたが、

嫌がる主人を有め有め通うこと数ヶ月、担当の女の先生も優しく手とり足とりよく教えて下さった御陰もあり、震えも止まり、色々の女性とも踊れる様になりました。となると君子豹変して私より夢中になり、気の合う仲間も沢山できダンスホールに意気揚々と通う程になりました。それから数年、今では自分でサークルを作り、初心者を教えております。私も手伝っております。男性が少なくて困っております。長年会社のお偉いさんであった男性は、プライドが高く、習い事を始めるには手数がかります。自分が人より覚えが悪いと思うともうダメです。テコでも動かなくなり、しかし若い頃少しやっただ人、運動していた人、個人差は仕方ないのです。自分にあつたサークルか社交ダンスの教室に一日も早く参加して下さい。年で覚えは確実に悪くなります。あせらずにゆっくりのんびり、健康増進の一万歩の散歩のつもりで、音楽を聞きながら歩きましょう。今話題の奥様ベッタリなヌレ落葉、ゴロ寝の粗大ゴミと疎まれるなんて勿体ない。男性不足で困っているサークルに参加して、大勢の仲間(女性)のために協力して下さい。

日本の再建、家族の幸福の為に仕事熱心、朝早くから夜遅くまでの会社人間から変心して、遊び上手の趣味人間になって、是非とも老後は二人仲良く楽しく過して下さい。日本も豪華客船での旅行人口が増加すること、船旅に欠かせない社交ダンスの仲間が増えることを願っています。

人生一区切

PART II

70期 若林 久二

我が母校静高の思い出話は沢山あるが、何故だかあまり心に残るよい事がなかった様で、今更ながら、悔いの残れり我が高校時代。前回会報中村竜ちゃん、作文不可とはとんでもない。ニューモア交りの内容は、どうしてどうして名文句。一気に読んで笑いきけ、彼のテーマは人生一区切り。いつもの会報到着するが、会社の仕事に精出すあまり、幹事の労苦に目をつぶり、常々無沙汰若林。ここらで顔を出さないと、「そんな奴などいたっけ」と全く忘れられるところまで追い込まれし事を考えて、今度こそはと万難排し、同期会に出席の通知を出すこと運のつき。幹事を務める味岡氏、「久しぶり

だな若林、次回の会報原稿書きを頼むぞヨ」。ご無沙汰ひけ目の我輩は、いやとは言えぬこの身のつらさ。何を書こうか迷ってみてもちっとも出だしが決まらずで、しからば中村竜二式、私の人生一区切。綴ってみようと思ってみたが、何だか自叙伝書くほどの、歳ではないよと自分で自分を言い聞かせ、つらつら書く身になりけり。僕らの学窓七〇期、常に一緒にたむろした、仲間は大勢いる中で、クラブ活動絵画部は、一くせある者吹き溜り。色盲会と称したが、一字変じて色魔会。当時のメンバー紹介すれば、六十九期の小柳誠一、沢田隆夫氏筆頭に、はにかみ滋ちゃんや建築界の大御所で、高木滋生氏知らぬ人、誰もいない程の有名人。も一人つづら目堅ちゃん、ワンカップ大関生みの親、押しも押されぬデザイン界の岩崎堅司大先生。みんなそれぞれ色魔だが、も一人当時の美少年、桃色遊戯も知らぬほど、只ウブだった希少価値。こと若林久二は同期であるにも拘らず、どういふ訳か上野の森では先輩後輩の間柄。卒業してすぐ自動車デザイン課とやらに就職したが、そこ

でアッと驚くタメゴロー。設計部門に同期杉田順氏がのさばれり。当時のいすゞのイメージは、トラック野郎が抜けきらず、僕の入社のかっけは、これからいすゞもヒルマンの、技術を生かした開発で、独自の乗用車開発に、打ち込む体制であったから。当時は高度成長期、各社の新車発表に、胸のときめく思いをし、ペレル、ペレット、フーリアン、色々手がけしこと憶え。当時は自動車産業の、日本の代表御三家は、トヨタに日産そのあとと自負しつつ、一生懸命頑張れり。そのうち東京オリンピック前の年、今の妻(サイ)と一緒にいるが、年は勿論年下で、早いうちから手なづけようと亭主関白強いてはみたが、敵もさるもの逆襲強し。これ又まずいことには上野の森の邦楽専攻同級生、「同級生ヨ」といばる妻(サイ)。全てが共同生活で、皿も洗う掃除もするし、いつの間にかサイベリスにて亭主関白夢くだけ。内情知らぬ善友は、今宵も女房のツンテンションを聞きながら、一杯飲めるとうらやむが、そのときや店屋(てんや)のそばすすり。そのうちいすゞの研究部門、通い慣れたる川崎地区から藤沢へ。

片道二時間半の通勤地獄となりにけり。サイは引越しいやよとごねり、理由は他にも色々あつて、今の会社に移ること早二十年。これまでデザイン開発一筋に「貝印」の名のもとで、カミソリ、ツメキリ、ハサミに包丁、カッターナイフに園芸大工、卓上器物に、調理道具、その他諸々取扱品目一萬点。カミソリ誰でも知ってはいらるが、その他の商品スーパードに行けば、いやでも目に入る貝マーク。今年は創業八十年。これを契機にCI導入、マークを一新衣換え。何と忙しかったそのため二年。好きなゴルフも一切できず、休み返上仕事に没す。先日いすゞの旧友と、会う機があつて聞きしこと、杉田順氏は元氣でいるかと尋ねてみたら、取締役デザイン部長の肩書きで、我が古巣に納っていることを聞き、僕は居なくてよかったと、今思うことしきり。

五十を超えると筋肉が、急速しはむとおどかさされ、しからば運動不足の解消法、晴れてゴルフをやる時の、足腰鍛えるためなどと、走り始めて丸五年、それが嵩じて今や趣味。あちこちレースに躍り出て、完走証も数々たまり、今や貝印チームの駅伝選手。但し一言つけ加えるが、それは残念ながら

壮年の部。おかげでまあまあ健康で、酒も飲めるし飯旨し。娘二人はまだ学生。学資注げどもまるでザル。小遣い渡した時狙い、「たまには親爺の肩揉め」と言ったら「私もコッてるの」。逆に揉んでとやられる始末。娘の体に触れるのは、

「こえ」

気軽に筆を執って
お送りください

31 鈴木 栄一
父鈴木栄一は八月二十五日、他界致しました。生前のご厚情心よりお礼申し上げます。

43 坪 晴行
昭和五十七年国立水戸病院院長を定年退職してより、全く元氣でいます。昨年七十七才の祝をし、以来読書や農耕にいそしんでいます。次回は何とか皆様と共につ会合に出席したく念願しています。

44 村井 東助
母校の校歌は、大正五年の制定で、戦前、戦中、戦後と歌いつづけられていた。私は静岡を離れ他國の者になつてはいるが、戦後は校歌を変えている高校が如何に多いかに気付いた。國の変化があるうとも、不動のまま歌い続けられる校歌は有難い。母校万歳。

45 大石 清
ぼんやり生きてきたら(七十五才(男の平均寿命)を越えてしまった。前途に控えるのは「死」の陥穽ばかり。一向に楽しくない。いざという時に備えて安楽死の服を配給してくれる秘密結社でも有るとよいが。どなたか御存知の方は内緒に教えて下さい。恩に著す。

46 鼠入 秀夫
七十四才、今でも現役で医者をつとめている。三十年來趣味として勉強してきた油絵の個展を来年開く予定です。

47 吉見 四郎
肝障害で一月から四月の初旬まで入院しました。

48 須山 達夫
小生相不変、鳥類保護会議員日本支部のため、日月火水木金と土働いております。

49 千葉 保次
母校の校歌は、大正五年の制定で、戦前、戦中、戦後と歌いつづけられていた。私は静岡を離れ他國の者になつてはいるが、戦後は校歌を変えている高校が如何に多いかに気付いた。國の変化があるうとも、不動のまま歌い続けられる校歌は有難い。母校万歳。

50 星野 三郎
重要文化財星野家住宅を守り、その家に住んでいます。江戸末期の建物で、本陣、庄屋、問屋を甲州街道三十三宿の一つとしてつとめ、明治十三年には明治天皇御西

43 山村 忠雄
西沢君ご苦勞様です。本年は正月早々入院、二月に退院してからも体調を崩して、只今糖尿の宣告をうけ食事療養中です。

44 白井 茂
胃を切つて九月末退院。その一週間に引越したので少しきつ

45 大石 清
ぼんやり生きてきたら(七十五才(男の平均寿命)を越えてしまった。前途に控えるのは「死」の陥穽ばかり。一向に楽しくない。いざという時に備えて安楽死の服を配給してくれる秘密結社でも有るとよいが。どなたか御存知の方は内緒に教えて下さい。恩に著す。

46 鼠入 秀夫
七十四才、今でも現役で医者をつとめている。三十年來趣味として勉強してきた油絵の個展を来年開く予定です。

47 吉見 四郎
肝障害で一月から四月の初旬まで入院しました。

48 須山 達夫
小生相不変、鳥類保護会議員日本支部のため、日月火水木金と土働いております。

49 千葉 保次
母校の校歌は、大正五年の制定で、戦前、戦中、戦後と歌いつづけられていた。私は静岡を離れ他國の者になつてはいるが、戦後は校歌を変えている高校が如何に多いかに気付いた。國の変化があるうとも、不動のまま歌い続けられる校歌は有難い。母校万歳。

50 星野 三郎
重要文化財星野家住宅を守り、その家に住んでいます。江戸末期の建物で、本陣、庄屋、問屋を甲州街道三十三宿の一つとしてつとめ、明治十三年には明治天皇御西

株式会社 越 士 越 化 成
株式会社 富士越化成

代表取締役 野澤正憲 (64期)

東京都渋谷区東2-14-9
TEL(409)3342代
TEL(400)9541代

不動産のご用はぜひ

三井不動産販売ネットワーク

城南リハウス株式会社

目黒店・自由が丘店・蒲田店

日東不動産株式会社

取締役社長 田島弘一郎

取締役副社長 調子達郎 (70期)

東京都目黒区下目黒1-3-27

TEL 03(491) 0171代

下の砌、御小休せられた部屋も當時のまま残っている。

47 佐津川太郎
9月30日をもって、勤務先東日エン지니어リング社を退社しました。また、来春早々に志太郡岡部町に転居いたすことになっております。

47 片山 正二
私、昨年末、軽い心筋こうそくの発作を起しましたが、其の後大分よくなりました。今年一杯は大事をとり、来年は非出席致したいと思ひます。

49 直原 敏衛
毎年九月頃開かれる静岡での同期会には東京からも必ず数名は集まっているのに、何故かこの東京の同窓会には集まりが悪く、その為欠席してしまうという悪循環が続いている。

今度旧友の娘が後輩である事を発見したので次回から出席する積りです。

50 富田 秀雄
七月末病氣入院の身となりましたが、再起を期して頑張ります。

50 伊藤 浪吉
健康でいます。昨年は千葉地裁の殺人事件の鑑定人をしました。今年はロス疑惑にかかりあっています。

50 大庭 左文
近日中に同窓会誌に投稿をさせて頂く心算です。何卒宜敷。題名は「郷愁・静岡弁」です。

52 小川善次郎
数年来試みている朝食の摂り方が体に良いようなので、何か御参考になるかもしれないと思ひ記してみます。

青汁コップ一杯。作り方は青い葉の野菜なら何でもよいのですが、小松菜、リンゴ、レモン、トマト、キウイをジュースーにかけて作っています。

52 遠藤 康
残照の人生を迎えましたが、お蔭様で元氣です。没せんとして未だ明るく、暖い残光を放ち、人の心を包み込む優しさを感じさせる残照の美しさが己が心としたいものと願いつつ生きていますが、願ひ通りにはいかないもののようにうす。

53 片桐 鎮夫
今春は53回卒業50周年。卒業以来静岡でのクラス会に参加はほとんどの方が誰かわからぬ記憶で驚きましたが、帰る頃には三分の一位の諸君を思い出しました。幹事に深く感謝した次第です。

54 安東 哲夫
総会にもなかなか出席できず残念です。子供達もそれぞれ独立し

念です。現在全くの独身生活ですが、引続き東洋基礎工業の勤務を続けております。職を離れた後については諸先輩を見習いつつ社会との連絡を保ちながら如何に有意義に生きべきか模索中です。

55 戸塚 正五
自衛隊退職後約十年間勤務した自動車保険料率算定会を三月に定年退職、これから何か好きなことでものんびりなど思っています。だが、知人の紹介で日本橋の小会社に六月から再々就職しました。健康で働けることを感謝しつつ毎日通っております。

55 山本 武
私は早大卒ですが、早大校友会では年会費三五〇〇円、終身会費七〇〇〇円、ただし卒後四〇年以降は三五〇〇円という制度があります。

先に静岡の同窓会にも同様趣旨を申入れましたが、関東でも終身制について、検討載きたいと存じます。

56 伊東 卓爾
名簿を拝見すると思ひもしなかつた身辺に静岡の卒業生がいてなつかしいですね。何かにつけて気楽に交流できる仲になったらいいと思います。同窓の方々のご意見

もうかがいたいです。よろしく。

57 加藤 健三
恩師諏訪先生のお顔はますますと描き出せるのにお目にかかる機会とてなくもう四十余年が経過、申しわけないことに存じます。この紙上をおかりして御無礼をお詫び致します。

現在の勤務が解かれました折には必ず静岡の地をふみたいと思っております。

59 望月 靖久
相変らず「ケンウッド」でやっています。この頃は静岡と東京を行ったり来たりです。

60 原 善三郎
しゃべる仕事から遠ざかり、近頃は見ることに、聴くこと、味わうことを楽しみとしています。

60 辻村 輝彦
清水からの通勤で少々バテ気味です。恐縮ですが封筒の宛名に、財団法人日本獣医学会を記載して下さい。上杉大兄へお願い。

六三年度会費拠出者

(順不同・敬称略)

昭和63年4月1日～63年10月31日

期別

三一 塚田英夫、鈴木栄一

三二 前田鉄三

三四 嘉悦一郎

三五 畔柳安雄

三八 石割正、大村秀雄(3)

永嶺忠雄

三九 増井四郎(3)

四〇 増田完五、野崎操一、杉本四朗

四一 中村安時

四二 岩波信平(4)村松直、宮澤次郎、内田正大、沼津善夫、坂野隆介、吉田幸一、

四三 西沢純三、小河直人、三好由三郎、北里良夫(3)、

望月孟夫、坪崎行(3)、山村忠雄、倉沢栄吉、長戸寛美、柳沢保雄、嶋田富治雄

四四 白井茂、高橋真一、佐藤文

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科

人間ドック

熱 函 病 院

院長 小坂 博 (67期)

住所 熱海市春日町12-2

TEL 0557-83-3131

鈴与株式会社

取締役会長 鈴木与平 (44期)

清水市入船町11-1
Tel 0543 (53) 3111 (大代表)
東京支社 千代田区丸の内2-3-2 郵船ビル4F
Tel 03 (284) 0551 (代)

トッパン・ムーア株式会社

取締役社長 宮澤次郎 (42期)

東京都千代田区神田駿河台1-6
TEL (295) 2411 (大代表)

凸版印刷株式会社

東京都台東区台東1-5-1
TEL (833) 2111 (大代表)

新東京印刷株式会社

代表取締役 梶原由三 (67期)

東京都中央区八丁堀2-1-7 神鋼ビル
TEL 03-553-8981 (代表)

株式会社 東電社

取締役社長 岩波信平 (42期)

東京都中央区日本橋2-1-21
TEL (271) 2701 (大代表)

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役 岩井平一郎 (57期)

本社 静岡市国吉田645
TEL 0542(62) 1111 (代)
東京 中央区京橋1-2 越前屋ビル
TEL 03(272) 4651 (代)

自動車・電機部品の自動塗装及びシルクスクリーン印刷

株式会社 勝山塗装工業所

代表取締役 奥澤徹 (59期)

本社工場 横浜市瀬谷区橋戸3-25-6 〒246
Tel 045-301-5545 FAX 045-301-5547
大和工場 大和市深見3706-1 〒242
Tel 0462-62-0340 FAX 0462-62-0343
東松山工場 東松山市大字新郷88-47 〒355
Tel 0493-24-2511 FAX 0493-24-2513

建築コンサルタント・設計施工業務
建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大雄

取締役社長 奥野孝 (53期)

本社 東京都台東区東上野2-18-7 共同ビル10階
TEL 03-834-5331 (代表)

建築設計・監理

株式会社 奥野建築設計事務所

取締役会長 奥野孝 (53期)

取締役社長 奥野進 (56期)

取締役副社長 奥野広 (58期)

本社 東京都台東区寿2-5-12 加瀬ビル
Tel 03-842-6831 (代表)
静岡事務所 静岡市安東2-8-14
Tel 0542-46-9378

総合広告代理店

株式会社 アドプロ

代表取締役 朝比奈正三 (67期)

東京都千代田区内神田3-4-5 岡崎ビル3階
TEL 03-254-2171 (代表)